

たまねぎ（秋播き春穫り）

栽培暦

月	8	9	10	11	12	1~3	4	5	6	7	
作型											
秋まき		育苗床準備	播種	本ぼ準備	定植	除草剤散布		追肥	追肥	かん水	収穫

栽培の特徴とポイント

小苗は越冬性が悪く、大苗では抽だいや分球するので適期播種に注意し、定植時に極端な小苗・大苗は除く。花芽分化は、品種によって異なるが11~15葉に達した株が10以下の低温に一定期間遭遇した時に行われる。生育初期には-8程度の低温にも耐えるが、球の形成肥大の適温は15~25の範囲にある。一方、日長は球の形成肥大に強く影響し、反応は品種により大きく異なり品種の早晩生が分化している。

根は浅根性で吸肥力が弱いので、定植後、根を十分に伸張させることが重要で、年内に十分活着させ、根群を発達させておく。

貯蔵性を高めるため、肥料を遅効きさせないようにし、腐敗しないよう収穫後の初期乾燥を徹底する。

品 種

○・K黄 : 中早生のF1品種。萌芽もおそく貯蔵用に適し、抽だいや分球の心配が少ない。熟期の早いわ(タキイ)りに吊り玉で2月頃まで貯蔵できる。

ターボ : べと病や灰色腐敗病に強く、切り玉と年内までの貯蔵用に適する中生種。玉は球に近い豊円球(タキイ)で、首部もよくしまる。抽だいや分球も少ない。

ネオアース : 甲高豊円球で皮色が濃く、テリ・ツヤが良い。熟期は貯蔵種としては早めの中晩生種。肥大性(タキイ)にすぐれ、貯蔵中の萌芽や尻部の動きが遅く、長期貯蔵が可能。

浜育 : 青切り用極早生種で、球形は甲高で締まりもよく、5月中下旬収穫。

(カネコ)

育苗管理

1 床土準備

本ぼ10a当り50m²の苗床を準備する。基肥施用後、畝幅130cm程度に畝立てする。

2 育苗床施肥(kg/50m²)

肥 料 名	基 肥	追 肥	備 考
苦土石灰	5~8kg		pH6.5~7.0が望ましい 追肥は生育状況に応じて施用する。
B M 熔 燐	2		
やさい硝加燐安333号	6		
やさい燐加安S540		(1.5)	

3 播種

播種適期は、平均気温が 15 になる頃から遡って 40 日前の前後数日間で、本県では概ね 9 月 10～15 日である。種子量は、本ば 10 a 当り 5dl 準備し、条まきの場合は条間 5～8cm に 5～10mm の深さにすじを付け粒間 5mm に種子を落とす（シーダーテープを利用すると省力的）。ばらまきの場合は 15ml / m² を均一に播種する。播種後 5～10mm 程度に覆土、鎮圧しかん水する。乾燥防止のため畝面にもみがらや切りワラを散布するとよい。

発芽適温は 15～25 で、5～6 日で発芽する。種子の寿命は 1 年くらいと短く、古種子の発芽率は悪い。

4 育苗管理

播種後 25 日頃に密生している所を条まきの場合は 1～1.5cm、ばらまきの場合は 2×2cm を目安に間引く。雑草が目立つ場合は間引きと同時に手取り除草する。

乾燥すると生育がばらつくので畝面が乾いたらこまめにかん水する。

追肥は播種後 30 日頃に生育に応じて施用する。

本ば管理

1 耕起及び畝立て

堆肥や土壌改良資材を散布し、できるだけ深耕する。基肥施用後、耕起、畝立てする。4 条植えの場合は、130cm 程度の畝幅を標準とする。転換畑では 20cm 以上の高畝とし、湛水しないよう排水路を整える。

2 施肥

施肥例 (kg / 10 a)

肥料の種類	総量	基肥	追肥		成分量		
					N	P	K
完熟堆肥	2,000	2,000					
苦土石灰	100～150	100～150					
B M 熔燐	40	40				8.0	
C D U 複合 S 555	40	40			6.0	6.0	6.0
やさい硝加燐安 333 号	60	60			7.8	7.8	7.8
やさい磷加安 540	55		25	30	8.3	7.7	5.5
合計					22.1	29.5	19.3

追肥： 融雪直後、 4 月中旬

4 定植

1) 定植時期 10 月下旬～11 月上旬 遅れると越冬性が低下する。

2) 栽植方法

畝幅 130cm × 株間 12cm × 4 条植え (条間 20 cm) = 23,000～27,000 株/10a

畝幅 150cm × 株間 15cm × 6 条植え (条間 15 cm) = 26,000～31,000 株/10a

3)採苗及び苗の選別

育苗日数 55～60 日の、葉が 3～4 枚、茎の直径 6～7mm、長さ 25～30cm 苗（400～450g/100 本重）を用いる。大きすぎると抽だいする可能性があり、小さすぎると越冬性、収量が低下する。

できるだけ根を切らないようにして定植当日に採苗する。小苗や大苗は採苗の際に取り除き、直射日光や風により、苗の根が乾かないよう濡れ新聞等で株元を覆っておく。苗を大小に選別し、深さ 3cm 程度に植え付ける。深植えにならないよう注意する。

地温 5℃ 以下になると根の伸長が弱まるので地温が下がらないうちに定植し、越冬までに十分根を伸長させるようにする。

5 除草剤散布

雑草防除のため、定植活着後と融雪後に除草剤を散布する。

6 追肥・かん水

雪どけ直後とその後 20 日前後に追肥する。収穫後の腐敗球防止のため、5 月以降は追肥しない。窒素は球の肥大初期までに十分吸収できるように施し、根や葉を発達させることが大切。窒素が多すぎると肥大が遅れたり貯蔵性が低下したりする。逆に不足すると球の肥大が悪くなり抽だいが多くなる。

水分不足では球の肥大が悪くなるため、乾燥が続いたら気温の低い時間帯に短時間に畝間かん水する。ただし、収穫間際のかん水は裂皮につながるので行わない。

病虫害防除

べと病：低温（15℃）多湿状態で発病多い。育苗中の発生にも注意する。予防的防除に努める

さび病：18℃前後で発生する。肥切れすると被害多い。窒素肥料の多用を避ける。発病初期に防除。

黒斑病：多雨多湿で多発。連作を避け、肥切れしないよう肥培管理する。

タネバエ、タマネギバエ、ネダニ：未熟な堆肥、有機物等の施用や連作を避ける。苗床での防除を徹底する。

育苗中は長雨後のべと病や黒斑病に注意する。融雪後、腐敗した株や病害株を抜き取り、他の健全株への伝染、拡散を防ぐ。

収穫・調製

1 収穫

茎葉が 70～80%倒伏し 2～3 日晴天が続いた後に収穫する。倒伏は、球の肥大充実が進むにつれ首の部分に中空部を生じ、この部分が簡単に倒れるためである。収穫は早すぎると減収し、遅れると腐敗が増加する。

青切り用としては、球の肥大を見ながら収穫し、根を切り皮をむいて調製する。

2 乾燥・貯蔵・調製

収穫時の降雨と貯蔵性は密接な関係があり、晴天の続く日を見計らって抜き取り、2～3 日地干し（玉内部の余剰水分が葉を通じてスムーズに排出される）した後に収納する。地干し処理は貯蔵中の腐敗防止効果が高く、1 日半の地干しで腐敗率はかなり低下する。

3 貯蔵

その後、風通しのよい小屋（直射日光の射し込まない通風のよい場所）に吊り下げて貯蔵する。コンテ

ナに並べて貯蔵する場合は、収穫時に葉を玉の上8~10cm残して切り落とし、風通しに注意し、あまり高く積み上げないで薄く広げて風乾貯蔵する。天候が悪い場合はファンや除湿機で強制乾燥するとよい。

長期貯蔵の場合、熱風乾燥処理(キュアリング)を行うと、品質向上、貯蔵中の腐敗防止に効果がある。40~45の熱風で12~16時間乾燥し、水分10%ぐらいまで減少させる。45以上になると品質が低下するので注意する。また、低温貯蔵の場合は、7~8月の休眠覚醒期後に葉を切り落とし、2前後の低温貯蔵庫で貯蔵する。入庫が遅いと冷蔵の効果は少なくなる。温度、湿度が高いと、萌芽、発根し腐敗することがあるので注意する。

4 調製

調製は摘果バサミで根を付けもとから、葉を玉上1cm程度で丁寧に切り落とし、軍手をして古皮をもみ落とし、サイズ別に選別する。

販売のポイント

地場産の新タマネギとして早生品種も活用しながら収穫後短期間に計画的に出荷するとよい。青切り用としては、球の肥大と市場価格をみながら収穫出荷する。

参考資料

表1 タマネギ収穫時期と収量性の品種比較(2005年)

メーカー	品種名	早晩性	収穫日		収量性
			無処理	マルチ被覆	
サカタ	ハイゴールド1号	極早	5月30日	5月20日	
カネコ	濱の宝	極早	5月30日	5月20日	
協和	ひろまる	極早	5月30日	5月20日	
丸種	玉の春	極早	5月30日	5月20日	×
カネコ	浜育	極早	5月31日	5月30日	
タキイ	マッハ	極早	5月31日	5月30日	
みかど	プレスト3	早	5月31日	5月30日	×
タキイ	ソニック	早	6月5日	5月30日	
渡辺	ハッピー501号	早	6月5日	5月31日	
七宝	七宝早生7号	早	6月5日	5月30日	
タキイ	O・K黄	中	6月13日	6月5日	
タキイ	ターボ	中	6月13日	6月5日	
小林	ツーク	晩	6月15日	6月13日	
カネコ	スワロー	晩	6月19日	6月13日	
七宝	もみじ3号	晩	6月19日	6月15日	
渡辺	ラッキー	晩	6月24日	6月24日	

耕種概要

- 1) 場所：野菜花き試験場内圃場
(富山県砺波市)
- 2) 播種日：平成16年9月15日
- 3) 定植日：" 11月9日
- 4) マルチ被覆は黒ホリマルチ使用
- 4) 収穫：茎葉が7~8割倒伏時